

## 「笹周と笹舟会の思い出」

玉井哲雄

笹舟会 40 周年の記念出版を亀井哲治郎さんが中心となって編集されるとなると、やはりどうしても亀井さんが編集された「廣瀬健の思い出」を思い出さざるをえない。そこに私は「廣瀬さんとの旅行」という拙文を寄稿したのだが、その中にも笹舟会、というか笹周の店のことが登場する。そこでまずその部分だけ引用する。

（廣瀬さんとの）最初の大旅行は 1977 年 11 月のソフトウェア工学研究状況の視察調査だった。このときは大きな視察団だったが、その中で廣瀬さんと、土居範久さん、吉村鐵太郎さん、そして筆者はとくに行動を共にし、後に 4 人組と称された。このときも、米国とヨーロッパを回る世界一周の旅だったが、この 4 人組の顛末記を書き出すときりがない。ただ、帰国後の次の出来事は、とくに印象的なので書いておきたい。

出張の清算などの後処理の相談で、廣瀬さんを早稲田大学に訪れた時のことである。多分、同じ年の 12 月か翌年の 1 月だったろう。打ち合わせがすんで、一杯やろうということになり、廣瀬さんに池袋の笹周に連れていってもらった。このように気軽に若輩者を誘うのも、廣瀬さんならではの言えるだろう。実は、笹周にはその 3-4 年前、会社の先輩と一度だけ行ったことがあった。しかし、この廣瀬さんとの同行が、その後の笹周や笹舟会との付き合いの始まりだろう。このとき、笹周の若旦那が（当時は本当に若かったろう）、「例の刀が届いていますが」と言って持ってきた。なんでも昔の「包丁正宗」という包丁の形をした名刀を現代に復活させるという刀鍛冶の試みに、廣瀬さんたちが出資したということのようで、鍛冶の方ではあまりうまくできなかったというコメントがあったと記憶している。廣瀬さんはその場で大枚をはたいて（という気がするが、実際に現金を持ち合わせていたのかどうかは記憶が怪しい）、それを引き取った。笹周の囲炉裏に炭が燃えている背景でのこの刀のやりとりは、鮮明な視覚シーンとして頭に焼き付いている。

ここまでが引用だが、この後、自分がいつ笹舟会に入会した（入会を許された）か定かでない。1982 年に笹舟会のイベントとして熱海の赤根崎にあった富田勲さんの別荘に皆で行き、船の上で菊姫を飲み、懐石弁当を食べながら花火を見たことがあった。そのときはまだ正会員ではなかったような気がする。翌年の夏にまた熱海に行ったが、そのときは会員だったような気がするので、その 1 年の間に入会が許されたのではないだろうか。福永光一さんと一緒にお許しが出たと思う。なお、熱海に 2 年行った翌年かどうか定かではないが、しばらく後に、小森昭宏さんの逗子マリーナの別荘に、笹舟会のメンバーで集まったことも思い出される。

いつ笹舟会に入会したかはっきりしないのは、その後しばらくして、会を休会していた期間があるからでもある。1985 年の終わりごろ、当時勤めていた会社の健康診断で肝炎の疑いが出た。それで 1986 年の夏に検査入院したが、ウイルス性肝炎ということだった。当時は肝炎ウイルスは A と B の 2 種類しか知られておらず、それ以外の正体不明のものは非 A

非 B と呼ばれていた。いずれ肝硬変から肝臓がんに進む可能性が高いという。それで酒を飲むどころではなくなり、笹舟会は休会のやむなきに至った。

かかっていたのは慈恵の肝臓専門の教授で、東大から来た有名な人だったが、その後その教授が定年となり、若い講師に代わった。その人が、これは今は C 型と言うんだ、教授から聞いていないか、と言う。それでまだ実験薬の段階だが、インターフェロンが効く可能性がある、やってみないかとの話である。もちろん保険は効かないが、実験として無料でインターフェロンを入手できると言う。この時点では副作用などのリスクもあまりよく分かっていなかったが、それを受け入れた。一度はリバウンドして失敗だったが、その医師がもう一度やってみようというので、また入院してインターフェロン注入の治療を受けたら、驚くことにウイルスは消え、その後の経過を見ても完治したと認められた。

笹舟会に復帰したのは 1993 年の 9 月らしい。日記によると 9 月 10 日に久しぶりに笹周で開かれた会に出たが、この日はこの年の 8 月に亡くなられた廣瀬健先生の追悼を兼ねていて、敬君や文ちゃん（廣瀬さんのご息子とご息女）も出ており、ゲストとして齋藤正彦先生や吉村鐵太郎さんが出席されていたとある。齋藤先生には大学 1 年生のときに「線形代数」の授業を受けたが、それ以来 25 年ぶりにお会いしたことになる。駒場のときの齋藤先生はフランスから帰国されて間もない頃で、今でもまだ売れている「線型代数入門」という名著を東大出版会から出されたばかりで、颯爽としていた。

結局、笹舟会への復帰は 7 年ぶりだったことになる。この間、時代は昭和から平成に移った。経済バブルが大きく膨らみ、そして弾け散った。個人的にも休会中の 7 年の間に大きな出来事が続いた。まず、結婚 11 年目にして初めて子供が生まれた。それが娘の美季子で、今は銀行に勤めているが、昨年は笹舟会に二度ほどゲストとして出させていただいた。その翌年、17 年間務めた三菱総合研究所という会社を辞め、筑波大学に移った。さらにその翌年の初めに父が亡くなった。母が一人残されたのが逗子の古くて大きな家である。それで友人の建築家に頼んで、古い家を取り壊し、新しい家を設計・建築してもらった。そこに移り住んだのが 1993 年 3 月である。この年の 8 月に廣瀬さんが亡くなり、9 月に自分は笹舟会に復帰したことはすでに述べたが、その前の 7 月に笹舟会の長老と言うのがよいのか、初期メンバーの山崎利治さんが還暦を迎えられ、会社を定年退職されてそれを祝う会があった。還暦と言えば、笹周の笹川周衛さんの還暦を皆で祝ったのは、その 5 年前の 1988 年だった。その還暦祝賀会の趣意書も、そのお礼に周衛さんが巻紙に毛筆で認められた礼状のコピーも、まだ手元にある。さらに 1993 年の個人的な出来事を続けて書けば、5 年勤めた筑波大学から東京大学に移ることになった。赴任したのは 1994 年 4 月だが、実質上人事が決まったのは 1993 年の会に復帰する前のことである。

ついでにこの休会中の別のエピソードを書いておこう。記憶では休会する前のことだと思っていたが、掘り起こしたら証拠が出てきて、それが 1987 年のことだったことが分かった。笹舟会をお休みしていたのにもかかわらず、一部の会員とは賀状の交換を続けていたようで、この年の正月に「教祖」佐藤總夫さんからいただいている。それが何と 2 枚ある。1 枚

目は普通に元日に来た。文面は

「頌春

ごぶさたいたしております。

ご健康はいかがでしょう。

私も少しずつですが、回復して参りました。いずれ、例会でお会いできることを楽しみにしております。

一九八七年元旦」

ありがたいことにこちらの病に気を使っていたいており、ご自分の健康状態も伝えられている。

ところが数日後にまた佐藤さんから年賀状が来た。これは年賀はがきでなく通常はがきに書かれているが、消印を見ると1月1日になっており、こちらからの年賀状を見て即座に出されたようである。その文面は次のようである。

「頌春

ご健康をお祈り申し上げます。

会の方は順調に運営されているようです。

どうか、気になさらず、ご健康第一になさってください。

(暮に書きました賀状、ご住所を一〇八号とまちがいました。もう一度、今度は正しく一一〇八号といたします。失礼の段、お許してください。)

一九八七年元旦」

このころ、私は渋谷にある代官山コーポラスという古いマンションに住んでいた。その住所表記はマンション名を明示する場合は「渋谷区猿楽町 12-1 代官山コーポラス 108 号」となるが、直接地番を指定する場合は「渋谷区猿楽町 12-1-1108」となる。おそらく会の名簿には前者が住所として載っており、こちらから出した賀状の住所表記は後者だったのだろう。しかし、それを緻密にチェックされ、あまつさえ出し直されるというのは、佐藤さんの完璧主義的な性格を表すものだろう。昔の年賀状はほとんどは捨てているが、このような面白いものは保存してあって、探したら出てきた。しかし、それを今回よく見たら、1通目の佐藤さん自身の住所は「上福岡市上の台」と書かれているのに、2通目は「上福岡市上野台」と書かれていることを発見した。佐藤さんが逆の立場なら、出し直すところだろうか。廣瀬さんに笹周に連れて行ってもらったことがきっかけで笹舟会に入り、7年間休会した後、最初に会ったのが廣瀬さんの追悼会だったというのも、何という因縁だろうか。幸いなことにその後は肝機能も正常で、よい酒を楽しんでいるというのはありがたいことである。